

刊行時に行われた加筆修正について

1. 難しい漢字に書き直される（まぬかれない→免れない、詮索→穿鑿）
2. 登場人物の表記がフルネームに。下の名前が付される。（会沢は→会沢光一は）
3. 細かい設定（車種やアルバイト）の加筆、年月日の修正
4. 一部除かれる
5. 太字になったものや太字から元に戻された部分がある
6. その他文章の直し（例 ～のだ。→～のだった。）
7. 『シンセミア』は「アサヒグラフ」に連載。同雑誌の休刊後「小説トリッパー」に移って書かれるたが、「アサヒグラフ」連載時の文章に対しての加筆修正が多い。「小説トリッパー」で連載されたものは、ほぼそのままの状態。
8. 連載第17回～18回の間に9・11があったものの、大きな変更はない。
9. 金森年生の記述

太字から元に戻されたもの

- 前向きに（単行本p28）
- そして同時に、感情的になってつい、先程から自身に似付かわしくない言動を取ってしまっている（p85）
- 笠谷宗太の悦ぶことならこれまで散々やってきたが、奴を頭に来させるような真似は何もしていないはず（p86）
- 昔はずっとそうだったっていうじゃないか。何をやるにも、根回しは万全だったんだろう？ あんたは前に、そう教えてくれたよ。（p198）
- 秘密主義（p274）
- みんなによく、女紹介してるだろ？（p274）
- あいつに関する妙な噂も広まっているみたいだしな（p276）
- どういう立場で俺に質問してるわけ？ どっちだ？（略）。どっちもだ。（p367）
- 警官にチクるみたいで気分悪いから（p370）

太字にされたもの

- ズドン（p22）
- 中山は噂の出所に気が付いている、俺が隠し事をしていることを（p66）
- フィスト・ファックを撮りたい、是が非でも、一度でいいからフィスト・ファックを試みている最中の男女にカメラを向けてみたいものだ（p74）
- 少女愛はやめられそうにないし、少女愛は総てを可能にする（p113）
- 「痛い痛い……」（p219）
- 「出して！！」「車、出して！ 早く！ お願い！」（p260）
- 俺は大丈夫なのか？（p305）
- 盗撮（p371）
- この酔っ払いは、市会議員の村西清茂だ。（下p11）

金森年生についての記述

二箇所書き加えられた部分がある。

1. しかも笑うとボロボロに欠けた前歯が剥き出しになる、死に損ないみたいな顔貌の男だった（p107）
2. これには金森年生がやや慌て気味に応じた。「勘弁してけろっす。俺が放火したのがばれっど具合悪いっす」／冗談だったらしく、笠谷保宏は笑声混じりに猶も悪ふざけして、「アハハ……まあでもよ、死人は出さねっけわけだから、バクらっでも大したごどにやあならねえんじゃねえが。末田んちさ電話ば掛けて、逃げろって教えてやってるぐらいなんだがらよ、逆に表彰もんだべす。アハハ……」（下p61）

省略された部分（太字含む）

（p129）交替の時刻は～の前。隈元光博

隈元光博は、彼自身にとっての大仕事をすでに一つ終えていたが、まだ町を離れるわけにはゆかなかった。怪しまれぬためにも出来るだけ永く留まるべきだし、大仕事を全部片付けたわけでもなかった。それは一銭にもならぬとはいえ、隈元にとっては重大な意味を持つ仕事ではあった。他人には理解し難いかもしれぬが、共感や同情を当てにするつもりもなかった。自発的な行動ではあれ、自らの発案なのではなく、総ては運命的に定められた自然の成行きだった—隈元光博は頑なにそう信じ込んでいた。町のことを知るほどに自分の果たすべき役割が明確化し、運命を受け入れざるを得なくなり、彼は覚悟を決めたというわけだった。

（p142）腹筋を～の前。田宮明

無事に生き延び、子孫を残し、一族の繁栄を維持するには、従来のやり方ではもはや駄目だ—無闇に目立つべきでない。我が家にとって大切なのは当然、血を絶やさぬことに尽きている—しかしそうはいっても、一体全体うちの跡取りはきちんとお勤めを果たしているのか？ 我が長男はいまいち頼りなく、一家を背負って立つ準備をいささか怠りすぎている。素直なのはいいが、自尊心が足りないのだ。こんなことではいつまで経っても、我が家族は自由を得られしない—何代にも亘って、町中のゴミ掃除を任せ続けるといわけだ。こんなことでは永遠に、神町の呪縛から抜け出せはしないぞ！

（p163）双子の母親～の前。星谷影生

思えば自分は今朝、その地震の揺れを感じて目覚めたのだと、言いながら星谷は気づいた。じつは日照り続きや地震に関してもまた、それが一体誰の仕業なのか、彼にはおおよその見当がついていたが、この場では話さなかった—彼女に報せたら町中に吹聴されそうだと判断し、ここでは控えた。

(p204) 段落の最後。中山正と拳銃の小学生

「何だお前、かわいくないね。ていうか、ぶっとばされてえのか？」大人気ない対応ではあるものの、金網に隔てられているので言った通りのことは出来そうになかった。少年もそのことを判っており、不敵な面構えで「バーン！」を連発し、雰囲気さらに悪くした。思い浮かぶのは失職に繋がりがねぬことばかりなので、中山は無視してその場から去ろうとした—少年はそれを自分の勝利と判断したのか、ついにはこんなことを喋りだした。「おい待て！ 抜けよ、お前のを抜けよ！ 本当に同じやつか、確かめろよ。おい、抜いてみろよ、早く！ やんのか？ やんないのか？ お前が抜く前に俺が撃っちゃうぞ！ どうすんの？ やんないのか？ 腰抜けめ！」拳大の石を一つ拾い、中山はそれを少年の顔めがけて思い切り投げ付けた—ガシャーン！ という音が響き、鉄柵全体が揺れはしたが、石は金網に跳ね返って地面に落ち、少年は無事だった。体を仰け反らせて呆然としている少年に対し、中山は子供じみた挑発を口にした。「アハハハ、どうした、撃たねえのか？ 撃ってもいいぞ、ほら、撃てよ」少年は腹立たしように唇を尖らせながら、数秒間、黙って中山を睨みつけた—恥らっているかのように、顔を真っ赤に染めて、鼻の穴を大きく膨らませて憤慨の感情を露にしていた。「……撃ちたいけど、撃たないよ。弾がもったいないからな、弾が……。お前なんか、本当は撃ち殺してやってもいいんだけど、今日はいいよ、許してやる」そう言うと、少年は背を向けて銃をタオルで包み、「死ね、バーカ！」と捨て台詞を残してさっさと更衣室のほうへ歩いて行行った。中山は中まで追いかけてようやく一瞬考えたが、所詮はガキの悪ふざけだと思い直し、ようやく自転車のサドルに腰を落ち着けて、ペダルを前に回転させた。自転車を漕ぎ続けるうちに、中山は胸の痞が気になりだした。いくら漕いでもその痞は消えず、意識したせいでむしろ次第に拡大し始めた。不思議なことに、股間がまた熱くなり、パンパンに膨張してすらい。何という見境のない男だ—軽い驚きを感じながら、中山正は自らをそのように評した。

(p240) 「了解」と丈士は返信した。の後 松尾丈士

これでさらにまた、面白いことになってきたと松尾は思う。出来事は、いつどんな場所でも起きており、決して隠されてはおらず、実情はどれもありふれていた。真実は目にしなければ、ほんのちょっと努力すればいいだけだった—他人の性器であろうが死に際であろうが、脱糞様子であろうがリンチの過程であろうが、夫を裏切る妻の振舞いであろうが、それらを見ることは馬鹿馬鹿しいくらいに容易く、快い安心感を齎した。遠くへ出掛ける必要などなかった。ど田舎の小さな町で充分だった—というか、小規模なほうがむしろ中身は濃くなるはずと思われた。エゴのある所なら必ず事件は発生する—松尾にとってはこれこそが真理だった。人間がいれば確実に、悲喜劇は生産され続ける—だからこそ、松尾丈士は人間を愛した。愛するがゆえに、彼なりに深く人間を知ろうとしていた。

(p330) 隈元の発言の後。田宮彩香

彩香は、隠しカメラと聞いて即座に博徳のことを思い出した。まさか博兄は、盗撮とかにまで手を出しているわけではあるまいな—こんな疑いを抱いてしまい、彩香は長兄が属すビデオ撮影サークルの活動実態が不明で不気味なのだと隈元に語った。それに対して隈元は、「盗撮サークル？ そりゃ充分にあり得る話だ！ 結局のところみんな、他人のチンコやらマンコやばっかり見たくてたまねえんだろ！ 特にこんなしょぼい田舎に暮らしてりゃあ尚更かもな！ どうせさ！ あんまり退屈すぎて、やることねえから他人の脱糞放尿場面でも観察してんだろ！ それが事実だとすれば、お前の兄貴はまあ、碌でもねえ変態野郎ってことになるが……しかしさ、それくらい大目に見てやれ。じゃねえと、お前のウンコ姿も覗き見られちゃうかもしれないぞ！」